



令和4年度 福島県文化財センター白河館
第3回館長講演会

国宝「漢委奴國王」 金印の考古学

公益財団法人福島県文化振興財団副理事長
兼 福島県文化財センター白河館長

石川 日出志



福岡市博物館所蔵

2022年12月4日(日)

とうほう・みんなの文化センター 小ホール

石川日出志館長のプロフィール

出身 昭和 29(1954)年生まれ 67 才
新潟県出身

略 歴 明治大学文学部考古学科卒業
同大学大学院文学研究科博士課程中退 文学修士
現在、明治大学文学部専任教授
福島県文化財センター白河館館長、公益財団法人福島県文化振興
財団副理事長を兼務

主な著作 『農耕社会の成立』岩波新書 2010 年
『「弥生時代」の発見 弥生町遺跡』新泉社 2008 年
『考古資料大観1 弥生・古墳時代 土器 I』(共編)小学館 2003 年

国宝「漢委奴國王」金印の考古学

石川 日出志 (まほろん館長・明治大学文学部教授)

【要旨】 天明4 (AD1784) 年に志賀島で発見された「漢委奴國王」金印は、AD57年に日本列島の倭奴国が漢・光武帝に奉貢朝賀した際に与えられた印で、日本外交史の幕開けを証明する実物資料として国宝に指定されています。しかし江戸時代以来贋作説があり、2000年から再び贋作だという主張が出されています。

私は、弥生時代を専門としますがこの問題には距離を置いていましたが、思いがけず2010年末から「参戦」することになりました。私はそこで、「漢委奴國王」という文字の意味ではなく、金印を考古資料として扱うことに徹して検討を進めました。その結果、法量・金属組成・字形・鈕形・鈕孔形のいずれも後漢初期の製品として全く問題がなく、なおかつ法量以外は江戸時代にはまったく知りえないことから製作は不可能だと結論づけました。本日は、その内容の要点を具体的に紹介します。

1. 「漢委奴國王」金印とは

単品では最も小さい国宝・「漢委奴國王」金印 (図1・2) は、江戸時代の天明4 (AD1784) 年2月23日、福岡県志賀島で発見された (図3)。印面が一辺約2.35 cm。印面に「漢／委奴／國王」5字が3行に彫られ、鈕は蛇形をなす。文字部が窪む白文で、封泥用の印である。この金印は、亀井南冥が発見直後に、『後漢書』倭伝の記事「建武中元二年 (AD57年) 倭奴國奉貢朝賀… (略) …光武賜以印綬」の「印」と判断し、現在まで定説となっている。AD1世紀中頃の倭国と漢王朝との通交を示す第1級の歴史資料として国宝に指定されている。

2. 眞贋論争

国宝に指定され、日本史教科書には必ず収録されるこの金印も、江戸時代以来くり返し偽物説が出されている (大谷1974)。考古学界では、1966年に岡崎敬が金印印面の各辺が平均2.347 cmと計測し、後漢代の一寸に合致すると判断し、それ以来誰もこれを疑わない。しかし、最近再び江戸時代製作説が強く主張され、論争となっている。金工技術史の鈴木勉『金印・誕生時空論』 (鈴木2010) は、印面の篆刻技法から江戸時代に製作された可能性が高いとし、古代文学の三浦佑之『金印偽造事件』 (三浦2006) も、当時の学問状況の検討から、亀井南冥が高芙蓉や藤貞幹と偽造に関与した疑いが濃いと推理する。

とある偶然から2010年末から参戦した私は、従来の金印研究が印文の読み方に重点を置き、モノ資料としての検討が不十分であることに注目し、考古資料として扱うことに徹した。その結果、以下のように後漢初期の製品であり、なおかつ江戸時代に製作することは不可能だと断定した。江戸時代贋作説はまったく成立しえない。

3. 「漢委奴國王」金印の複眼的研究

(1) 尺度の問題 岡崎敬 (1968) は、印面一辺が平均2.347 cmで、戦後に発掘された後漢代の尺の1寸と矛盾せず、AD81年製の建初尺 (23.5 cm) の1寸に合致することから真印と判断した。しかし肝心のこの建初尺は出土品ではなかった。それ以上に深刻なのは、江戸時代に後漢代の1寸は2.35 cm内外であることが知られていたことである (中村惕齋：滝本1914)。それでも、戦後の出土尺を集成すると1寸2.35 cm内外で (図4)、金印の一辺長と出土尺の1寸と矛盾しない。すなわち、尺度で眞贋は判断できない。しかし出土品と矛盾しない点も重要である。

(2) 金属組成 「漢委奴國王」金印の金属組成は、蛍光X線分析で金95.0%・銀4.5%・銅0.5%と測定されている (本田ほか1990)。発掘された金製品の測定値をみると、前漢代・後漢代とも95~99%であり (図6)、金印の値に矛盾はない。では、金品位95%の製品を江戸時代に極秘裏に作れるのだろうか。当時、金は金座という組織で厳重に管理され、不正が発覚して島流し・御家取潰しにあった事例がある (大澤1999)。市場に流通する金製品としては小判がもっとも品位の高い金製品で、江戸時代前半85%内外、後半56%である (図5, 吉原2003)。色揚げ手法で表層は90%程度に品位を上げることはできるものの、表層わずか2 μmにすぎない。戦後2回、比重法で90%以上

と測定されており内部まで高品位なので、小判を鍍漬し色揚げしたものではない。しかし、そもそも江戸時代に、後漢代の金製品が95%以上の高品位だという事実は知り得ない。

(3) 蛇鈕印の中の「漢委奴國王」金印 贋作するとして、江戸時代に鈕をこんな蛇形につくることは可能だろうか。江戸時代に中国から多数の印譜が輸入されており、その中でもっとも評価の高いのが顧從徳『集古印譜』(1575版)である。その中に「晋蛮夷率善任長」銅印が虺鈕(虺=まむし)なのは南方の地に蛇虺が多いからだとのことで、蛇形の鈕があることは分かる。しかし、代表的な鈕形を図示した箇所には虺鈕はないので、どのような蛇形にすればよいか全く分からない。一般に蛇形と言えどぐる形か蛇行形であろう。ところがこの金印は異様な蛇形をしている。亀井南冥がよくもこれを蛇形と判断したものだと驚くほど異様な形状である。

形状が特異な理由を解きほぐしたのが大塚紀宜氏である。大塚氏は、当初駱駝形(駱鈕)に製作されたのが、のち上部が蛇形に再加工されたと判断した(大塚2008など)。確かに、下半部に駱駝の四肢が明瞭に残り、前から見ると頸が直立し、上から見ると左右対称形である。蛇形なのは上部だけで、頭が後方を振り向き、尻尾は渦巻形で、胴部も横から見ると前後に螺旋形の蛇形に見える(図8)。さらに表面をよく観察すると、下半部と上半部の表面の状態が異なり、下半部だけに駱駝の体毛を表現した細かい刻線がある。私は大塚説を全面的に支持する。

次に、この金印が駱駝鈕の再加工品と認めた上で、秦漢魏晋代の蛇鈕印を集めて、時期ごとの変遷が追えるかを検討する。秦漢魏晋代の蛇鈕印を集成すると、形態を確認できる実例が40余例ある。これを形態的特徴から分類する(図7)。Ⅰ類は印台に蛇体が独立してのもの、Ⅱ類は印台に蛇体がべったり貼りついて一体化したもの。さらにⅠ・Ⅱ類とも細部形態で細分する。Ⅰ類のうちA1類は鈕が半環状でその前後に蛇の頭と尾がつくもの(1・2)、Bは頭から尾まで螺旋を描くもの(3)。Ⅱ類は、AはⅠB類に似て蛇体が螺旋～渦形を描き(4・5)、Bは身幅が狭い左右対称形になったもの(6~8)、Cは上から見て螺旋=とぐる形のもの。「漢委奴國王」金印は1例ながらⅡA2類に分類する。蛇鈕印は、田字格の有無や字形で秦～前漢が判別でき、後漢以後は漢・魏・晋の王朝名が記されるものがほとんどなので時代が判別できる。図7の表に各類型と時期の相関関係を整理した。わが金印は、前漢中期のⅠB類や前漢後期のⅡA1類と、後漢以後のⅡB1・2類との中間の形態であり、後漢前期にこそふさわしい。

さらに、これら蛇鈕の諸類型がどのような変遷過程をたどるのかを再検討した結果、とても不思議なことに気づいた。それは前漢代の蛇鈕ⅠA1類→ⅠB類→ⅡA1類という変遷とはべつに、後漢代に駱鈕を再加工したこの「漢委奴國王」金印の蛇鈕ⅡA2類が起点となってそれ以後の蛇鈕類型ⅡB1・2類が生まれるのである。ⅡB2類は比較的多数の類例があり、定型化したといってもよいもので、それはこの金印から生まれた。漢王朝が周辺諸民族を懐柔する冊封制度が整備されつつあるなかで、南方諸民族に与える蛇鈕印の形態はこの金印が起点となったと判断できる。

江戸時代にはたして、こんなも特異な蛇形で、しかも前漢代と後漢代との中間的な蛇形をデザインすることができただろうか。現代であれば、考古学および美術史の研究から、戦国代から前・後漢代にかけて龍や虎など各種の獣形が頭部を後方に反転し、尾が渦形となる図像が多数確認できることが知られている。後漢代であればこんな蛇形もまったく違和感ないのである。

前記のように、江戸時代には中国から多数の印譜が輸入されたが、そこに虺鈕・蛇鈕の図はない。では、蛇鈕印の実物があった可能性はどうか? 日本に古印の実物がもたらされたのは、1880年に楊守敬が来日した際が最初とされる。江戸時代にはなかったと断定することはできないものの、私が画像を確認している漢魏晋代印は5000例以上あるが、そのうち蛇鈕印は40数例しかない。江戸時代に古印がもたらされたとしてもその中に蛇鈕がある可能性は1%以下にすぎないことになる。さらに、現在知りえる蛇鈕40数例の中にわが金印と同形の実例は一例もない。

(4) なぜ駱駝形から蛇形に再加工されたのか では、なぜ当初駱駝形に作られ、のち蛇形に改められたのか。この問題を考える糸口として朝鮮半島周辺の印を集めてみた。まず、漢の出先機関である楽浪郡で発見された印をみると、鈕形のほとんどは亀鈕・鼻鈕・瓦鈕・半環鈕・両面印で、漢王朝内の官印・私印の鈕形と共通する(図9-1)。しかし1例のみ駱鈕がある(図9-2)。「天租歳君」銀印で現在の北朝鮮東北～東部域の「天租」・「歳」に与えた印である。さらに東夷諸民族の印を集めてみると駱鈕か馬鈕である(図9-3~5)。これは匈奴・鮮卑・羌・氐など北方か

ら西方の諸民族に与えた印の鈕形と共通する。考えてみれば、倭奴国は東夷の一員であるから、駝鈕につくるのはむしろ当然とみるべきなのである。

では、なぜ蛇形に再加工されたのか。残念ながらこれは推定となるが、それは、後漢書に記載されたように、使者から奴国は「倭國之極南界也」という情報が伝えられたために、南方の蛮夷は蛇鈕が基本であることから蛇形に改められたであろう。蛮夷印の鈕形を集計すると、写真で確認できるのはすべて蛇鈕であることがこれを傍証する(図10)。

(5)「漢委奴國王」の字形 この金印の各種検討の中でもっともその製作時期を絞り込めるのが「漢委奴國王」の字形である(図11)。中国では、1980年代までに羅福頤が璽印研究を飛躍的に進展させ(羅1987)、さらに孫慰祖氏を中心に1990年代以後、考古学的情報や封泥研究も取り入れて璽印研究の精度を高め、改めて体系化を行った(孫1993・2010など)。孫氏の璽印編年を援用して字形の検討を行う。

まず、「國」字はすでに王人聰・葉其峯(1990)が前漢と後漢の違いを示している(図11-A)。「國」の中の「戈」字の第1・3・4画に違いがある。第1画は前漢代では右下がりなのだが、後漢代には水平になる。第3画は前漢では曲率が弱く、後漢代には強く曲がるか折れる例が圧倒的。第4画は前漢代が横L字形なのだが後漢代の多くは一直線となる。「王」字(B)も前漢と後漢の違いが明確で、まん中の横線が前漢では上方に偏り、後漢では中央となる。「漢」の「彳」部(C)は、前漢は曲率が強いのが後漢は直線となり、間の前漢後期から王莽代では下半部が直線度を増す。左上の縦短線が逆L字形になるのは前漢末から王莽代がほとんど。「委」と「奴」は「女」部(D)が見分けるポイントで、「己」形の縦線部が前漢では上方が短く、後漢では上下が同じになる傾向が見いだせる。

「漢委奴國王」金印の5字を見ると(図13)、「國」字の「戈」部の第1画はほぼ水平だがかすかに右下がり、第3画は印影では直線に見えるが実際の彫りでは直角に折れ(図2左)、第4画は横L字形なので、前漢末～後漢初期の特徴が明瞭。「王」字は、真ん中の横線がほぼ中央でわずかに上に偏り、横線の両端が広がるのは前漢末から後漢初めの特徴。「彳」は上半だけがかすかに曲がり、左上の縦線が逆L形なのは前漢末～王莽代で、下半部が直線的なのは後漢代に特徴的。「委」・「奴」の「女」部は前漢と後漢の中間的。このようにこの金印の5字は、前漢末～王莽代の特徴を持ちながらも後漢代の特徴が現れ始めているので後漢初期と断定できる。「彳」の上部と下部の彫りの拡大写真(図2)をみると彫り痕跡が明瞭に異なっており、わずか1寸四方ながらきわめて微細な彫り分けをしている。

なお、2009年に西安北郊の廬家口村で発見された新莽代(AD8-23)の封泥群(図12:馬2016)との比較も重要である。これらの封泥群は、「漢委奴國王」金印の約1世代前の文字群で、「彳」・「女」・「國」・「戈」・「王」はいずれもわが金印よりもわずかに古い特徴をもつことが確認できる。この明瞭な差異はきわめて重要である。

4. 「漢委奴國王」金印を江戸時代に贋作することは不可能

以上述べた諸点は相互に全く矛盾がないので私は後漢初期の製品と断定する。しかし、この金印文字の諸特徴を江戸時代には再現できないことも示す必要もあろう。それには、江戸時代にもっとも信頼された印譜の顧從徳『集古印譜』に収録された印には、上記の「彳」・「女」・「國」・「戈」・「王」に該当する特徴の文字がないことを挙げれば十分であろう。

しかしダメ押ししよう。図14は、三浦2006が贋作に関与したと推理した藤貞幹が、『好古日録』で中国の印譜『宣和集古印史』から引用した「親魏倭王」印、卑弥呼が魏から下賜された印である。その「王」字は前漢代の特徴が明瞭で、「魏」の「委」扁下部の「女」も前漢代の形である。「漢委奴國王」5字のうち、現在ではもっとも容易な「王」字でさえ貞幹は時代判別できていない。そんな貞幹がはたして「漢委奴國王」5字を後漢初期の特徴を再現(デザイン)することができたのであろうか。同じく三浦2006が関与を疑う高芙蓉の篆刻にも、残された印に同種の特徴はまったく見られない(図15)。それでも江戸時代贋作説を主張するのであれば、それが可能であることを具体的に実証する必要がある。

5. その後

以上のように「漢委奴國王」金印を様々な角度から検討を進める中で、ある時、この金印の鈕孔の底が異様に深く、二段に窪むことを知り、そしてこの翌年に製作された「廣陵王璽」金印も酷似する鈕孔形態であることを観察して、

かつて岡崎敬氏が外見の特徴から同じ工房で製作されただろうと推測したことを補強するものだと気づいた(図17)。でもなぜ後漢初期にこんなに鈕孔が深くなるのかまではわからなかった。

この金印を理解するために、大塚紀宜氏は駝鈕の、私は蛇鈕の類型化を進めた。しかし銅印が多く、発掘資料も多くはない。漢魏晋代の印の変遷をもっと詳しく跡付けるには、確かな発掘資料であり、金銀印も一定数あり、かつ形態的属性が詳細につかめる印の検討が望まれる。それには漢魏晋代の官印の実例が多い亀鈕が最適であり、資料を集めて亀鈕の類型化と変遷を検討してみた(図16)。すると、亀鈕は秦代に出現し、前漢代以後多数みられる。前漢代の亀鈕は、ミズガメ・クサガメ形で四肢が高く、鈕孔は高く大きい。ところが新莽代になると亀鈕がリクガメ形となり甲羅は高いものの四肢は低くなり、それは後漢初期まで続く。印は、幅一尺六寸(約37cm)・長さ二丈一尺(約490cm)の綬を用いて身につけた。その綬を通すのが鈕孔であり、前漢代の亀鈕の鈕孔は綬を通すことが可能なのに、新莽代から後漢初期になると鈕孔が著しく狭くなる。そこで外形のデザインは保持しながらも綬を通すことができるように鈕孔が深くなるのであろう。まだ、鈕孔内を観察した亀鈕の実例は少ないので、亀鈕の直径5mm内外の鈕孔の中をもう少し観察する必要がある。皆さんには笑われそうですが、そんなこともこの金印の研究には必要です。

以上述べてきたように、国宝「漢委奴國王」金印は確かに『後漢書』倭伝が記すように、AD57年に漢の都・洛陽で製作されて「倭奴国」に与えられた印の実物とみなしてよい。

しかし、こうした検討過程を通して、中国古代の璽印を考古学的手法で分析することによって、璽印研究に相当の貢献ができることを実感した。そこから最近では、考古学の一分野として「璽印考古学」というジャンルを設けることを提唱するに至った。ある方から頂いた厳しい内容の書簡から始まった「漢委奴國王」金印の考古学だが、今ではその方に大いに感謝している。

【主な参考文献】 五十音順

- 石川日出志 2017 「漢委奴國王」金印の複眼的研究『第五届「孤山証印」西泠印社国際印学峰会』下冊, 和文 1544 - 1551 ページ・中文 1552 - 1563 ページ, 西泠印社出版社
- 石川日出志 2019 「複眼的日本古代学研究—金印をめぐる実践—」『古代学研究所紀要』第28号, pp.3-25, 明治大学日本古代学研究所
- 石川日出志 2021 「両漢代亀鈕の型式学・試論」『古代学研究所紀要』第30号, pp.3-21, 明治大学日本古代学研究所
- 石川日出志 2022 「秦漢魏晋代印・蛇鈕の型式学」『古代学研究所紀要』31, pp.3-30, 明治大学日本古代学研究所
- 大谷光男 1974 『研究史 金印』吉川弘文館
- 大谷光男 1994 『金印研究論文集成』新人物往来社
- 大塚紀宜 2008 「中国古代印章に見られる駝鈕・馬鈕の形態について」『福岡市博物館研究紀要』第18号, 84(1) - 71(14) ページ, 福岡市博物館
- 岡崎 敬 1968 「漢委奴國王」金印の測定『史淵』第100輯(九州大学文学部考古学研究室1975『志賀島』pp.84-92)小学館(編・発行)2017『燕子花図屏風 金印』週刊ニッポンの国宝100-vol.3 ★金印の鮮明な写真を収録★
- 鈴木 勉 2010 『漢委奴國王』金印・誕生時空論—金石文学入門 I 金属印章篇—』雄山閣
- 滝本誠一(編)1914 「律尺考驗 并三器攷略」『日本経済叢書』巻2, 日本経済叢書刊行会
- 福岡市博物館(編・発行)2015 『新・奴国展—ふくおか創世記—』
- 本田浩二郎 2016 「国宝金印「漢委奴國王」の鈕孔に関する視点」『福岡市博物館研究紀要』第25号, pp.66(1)—61(6), 福岡市博物館
- 本田光子・井上充・坂田浩 1990 「金印その他の蛍光X線分析」『研究報告』第14集, 福岡市立歴史資料館(大谷1994再録)
- 三浦佑之 2006 『金印偽造事件』幻冬社新書
- 【中文】発行年順
- 羅福頤 1987 『秦漢南北朝官印徵存』文物出版社
- 孫慰祖 1993 『兩漢官印匯考』上海書画出版社・大業公司
- 孫慰祖 2010 『歴代璽印断代標準品図鑑』吉林美術
- 丘光明 2012 『中国古代計量史』安徽科学技術出版社
- 馬驥 2016 『新出新莽封泥選』西泠印社

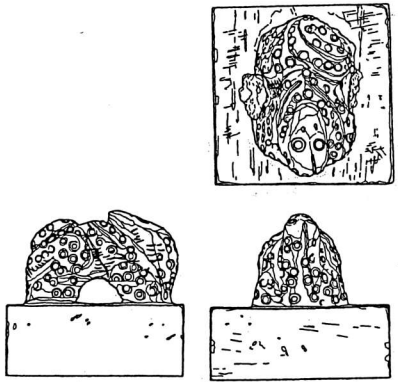
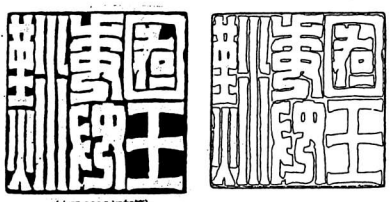
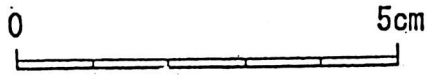
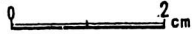


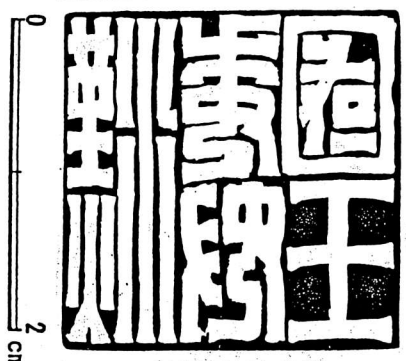
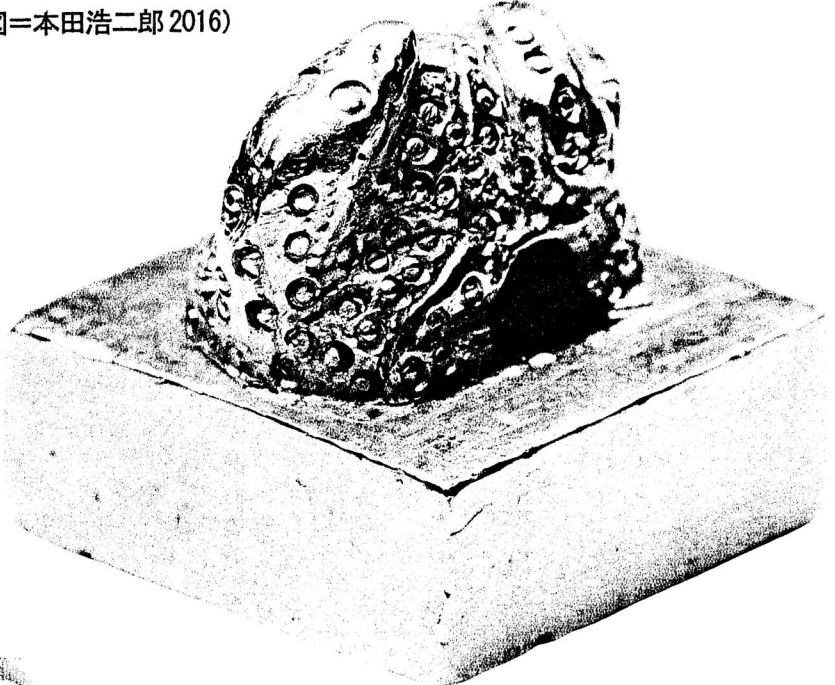
図3 金印出土地



(本田 2016 に加筆)

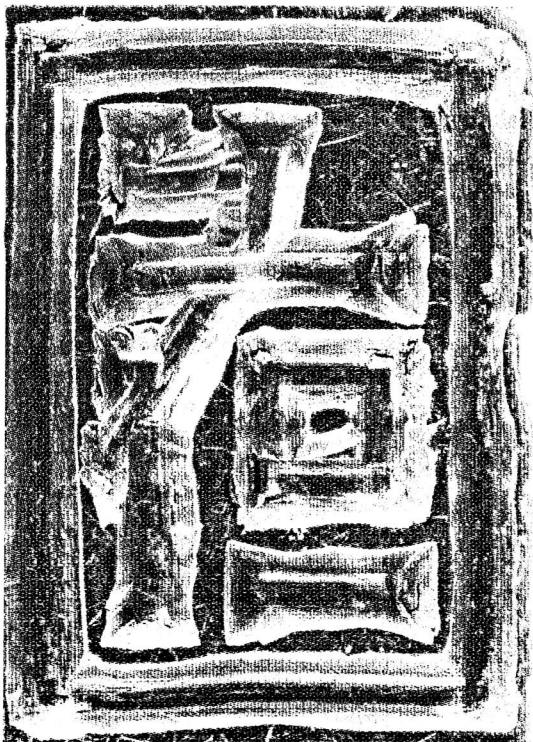


(実測図=本田浩二郎 2016)

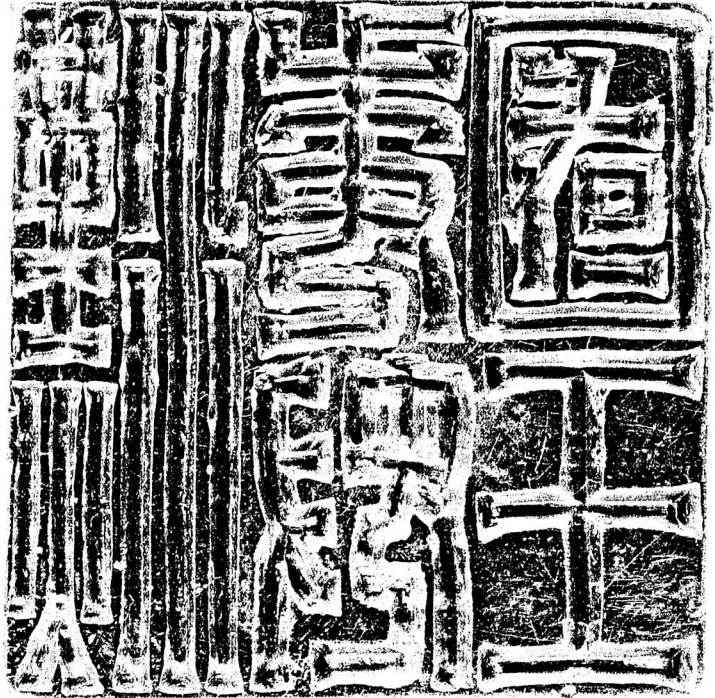


(本田 2016 に加筆)

図1 「漢委奴國王」金印



「王」の第三画に注目 (約8倍)



(約4倍)

(『新・奴国展』2015)

図2 「漢委奴國王」金印拡大写真 印面 2.347cm 四方・高さ 2.236 cm・重さ 108.729g

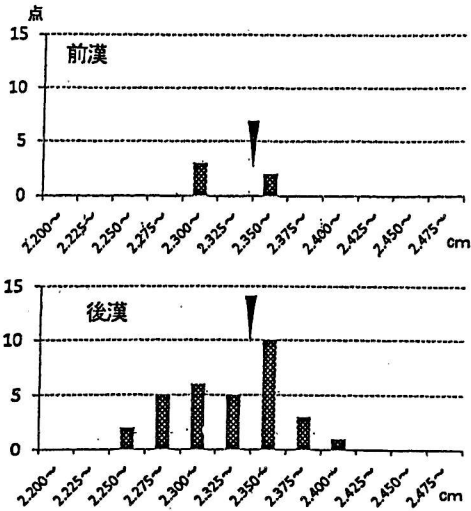
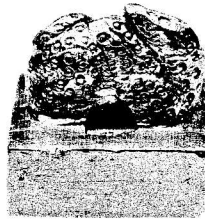


図4 漢代出土尺の1寸 (石川 2015)



金 95.0%・銀 4.5%・銅 0.5%

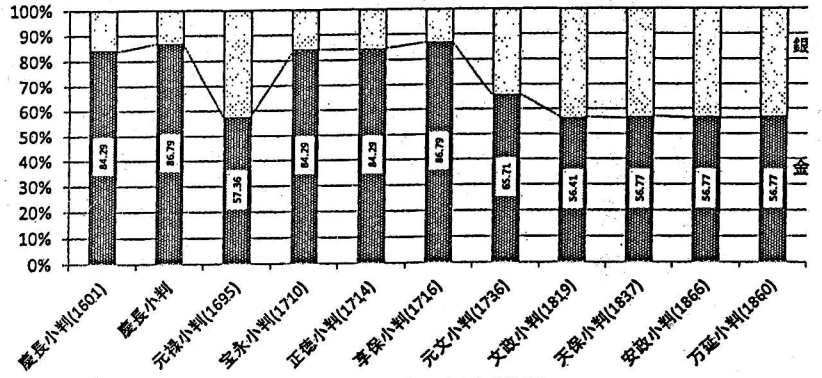


図5 江戸時代小判の金品位推移 (石川 2015)

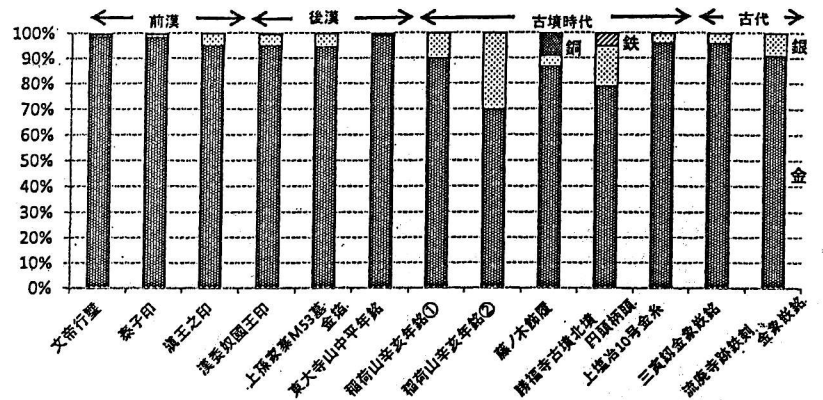


図6 遺跡出土金製品の時代別金属組成 (石川 2015)

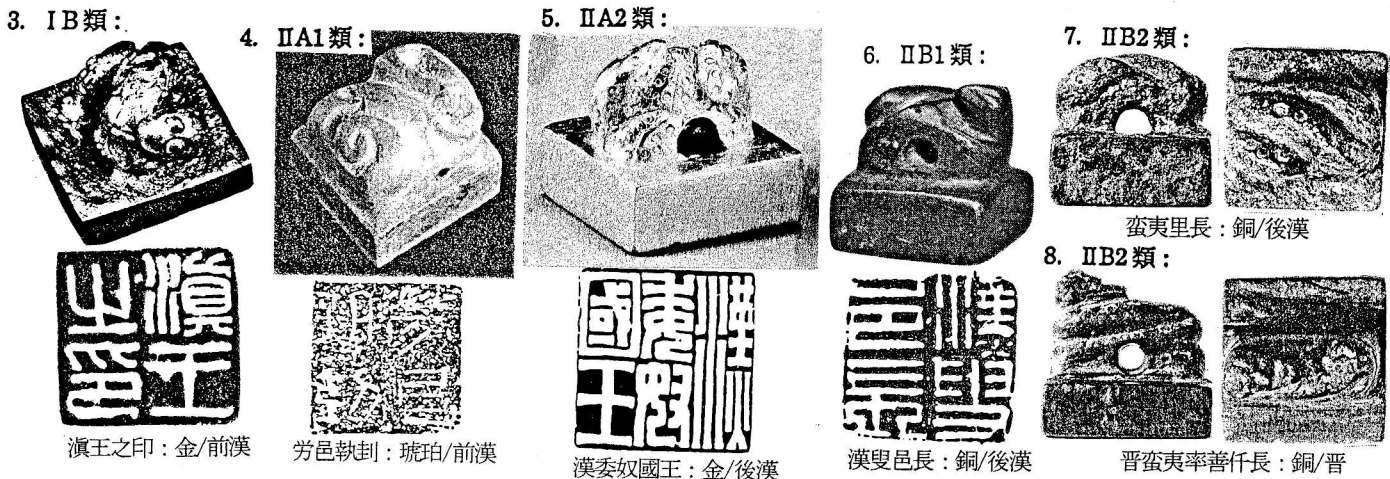
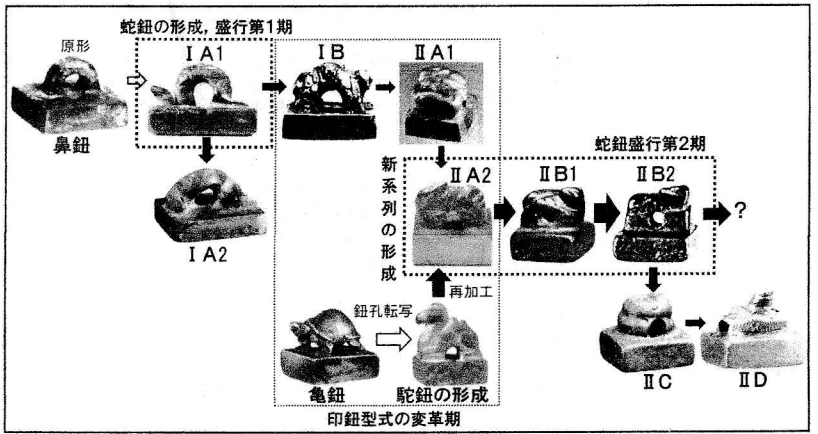
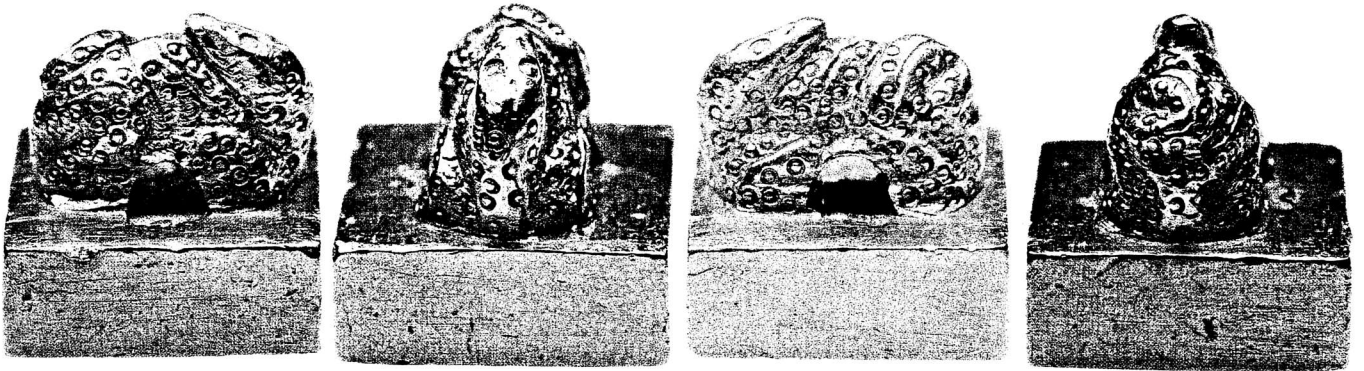
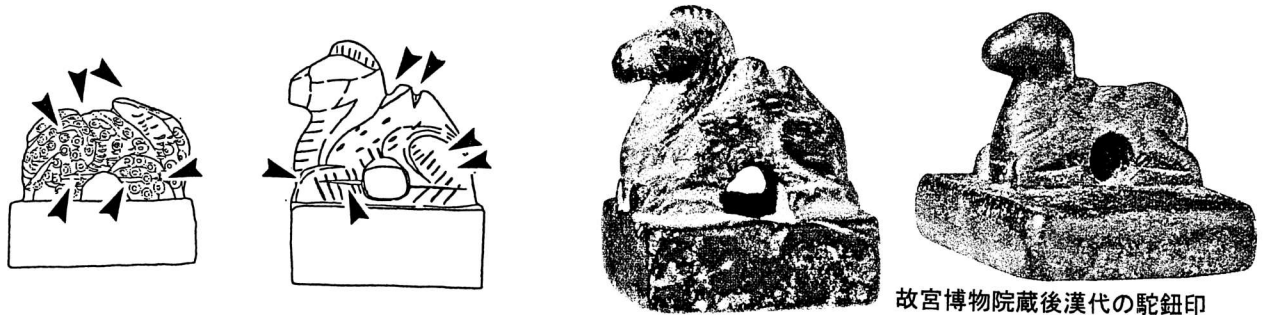


図7 蛇鈕印の分類 (類型) と帰属年代: わが金印は後漢初期とみるべき



蛇形なのは鈕の上部だけで、下半部は駝鈕の四肢が残る（『新・奴国展』2015）



故宮博物院蔵後漢代の駝鈕印

図8 「漢委奴國王」金印は初め駝鈕として製作されてのち蛇鈕に再加工された



1. 「王根信印」銀印

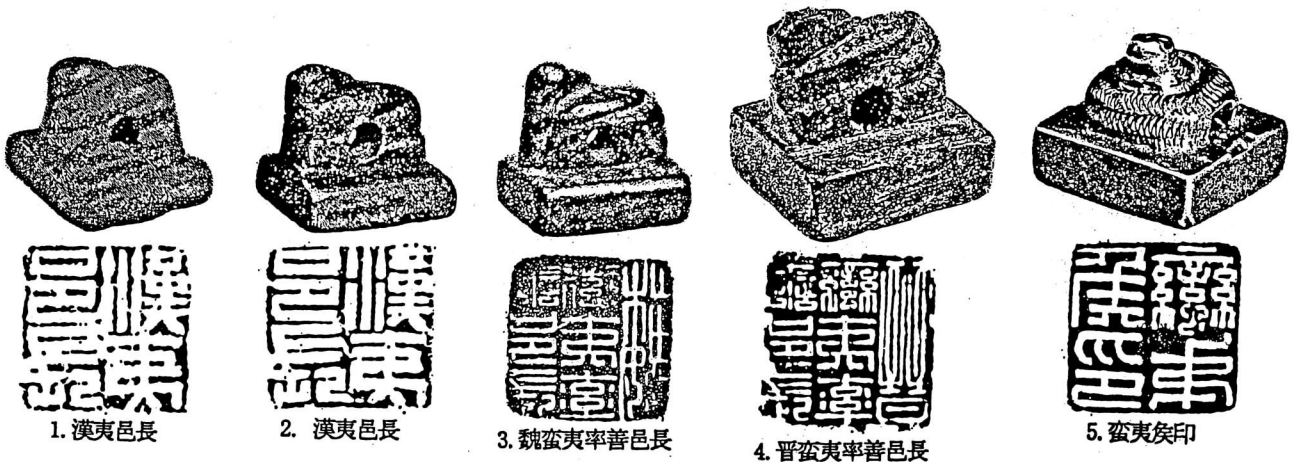
2. 「天租菴君」銀印

3. 「晋率善穢佰長」銅印

4. 「晋高句麗率善佰長」銅印

5. 「晋高句麗率善邑長」銅印

図9 東夷の印：1・2は楽浪漢墓出土。楽浪漢墓の印は亀鈕など漢王朝内の鈕形と同じだが「天租菴君」銀印だけ駝鈕



1. 漢夷邑長

2. 漢夷邑長

3. 魏蛮夷率善邑長

4. 晋蛮夷率善邑長

5. 蛮夷侯印

図10 後漢魏晋代の蛮夷印の多くは蛇鈕

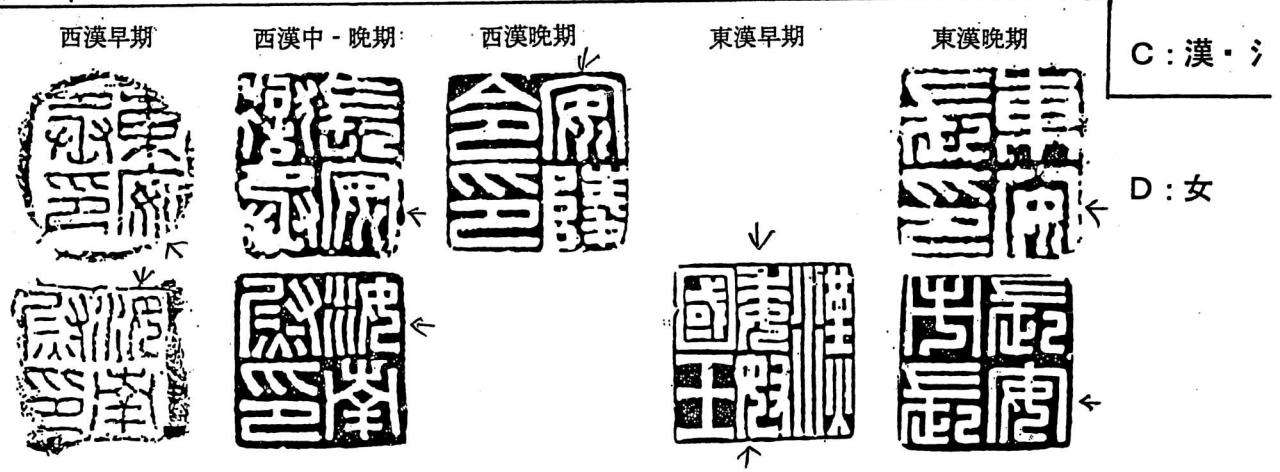
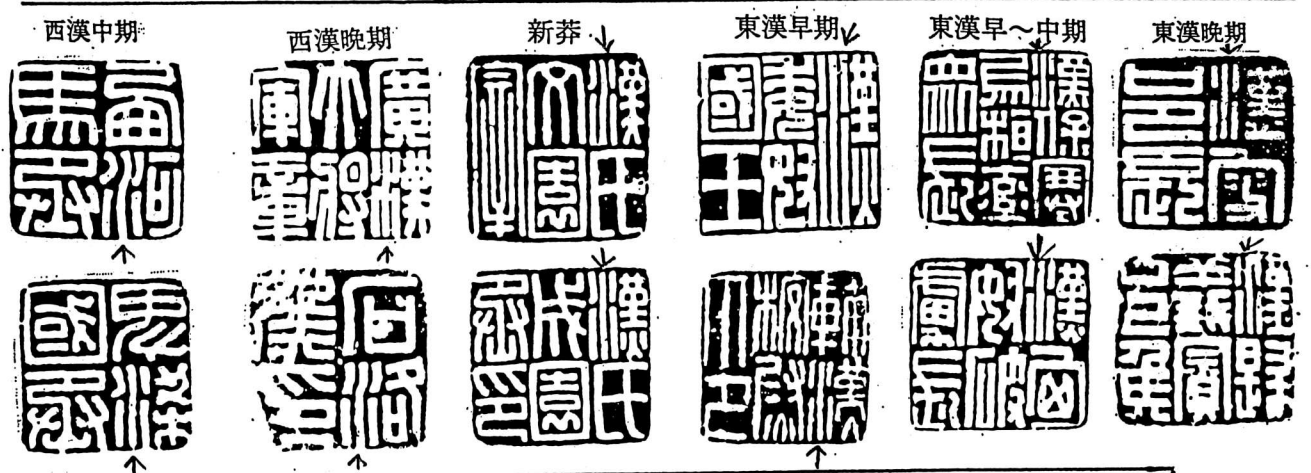
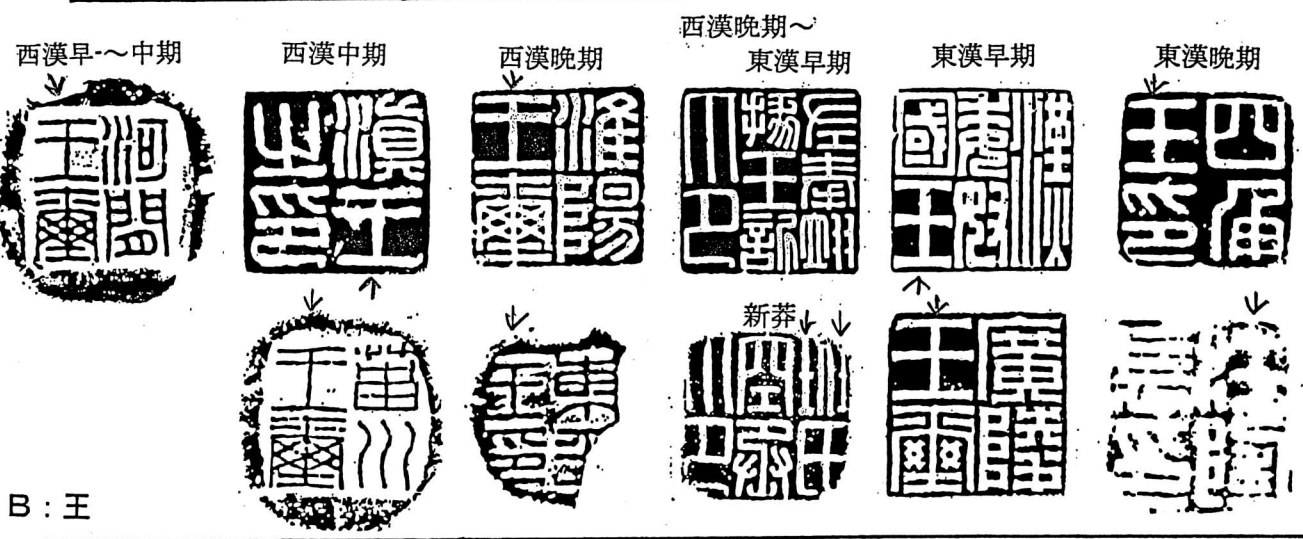
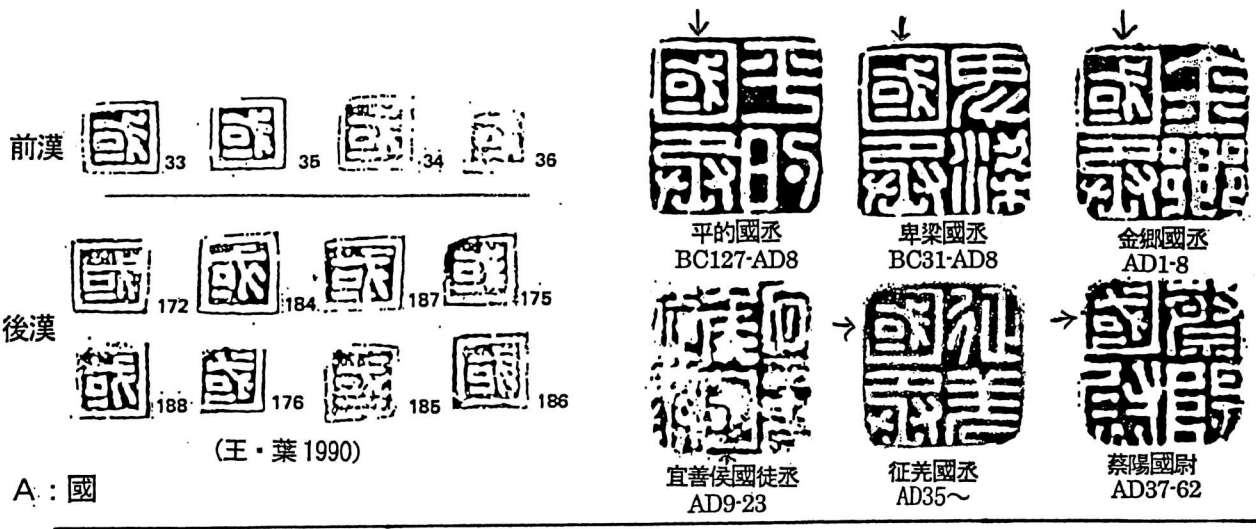


圖 11 國 (A), 王 (B), 漢・彡 (C), 女 (D) 字形の時期別変異

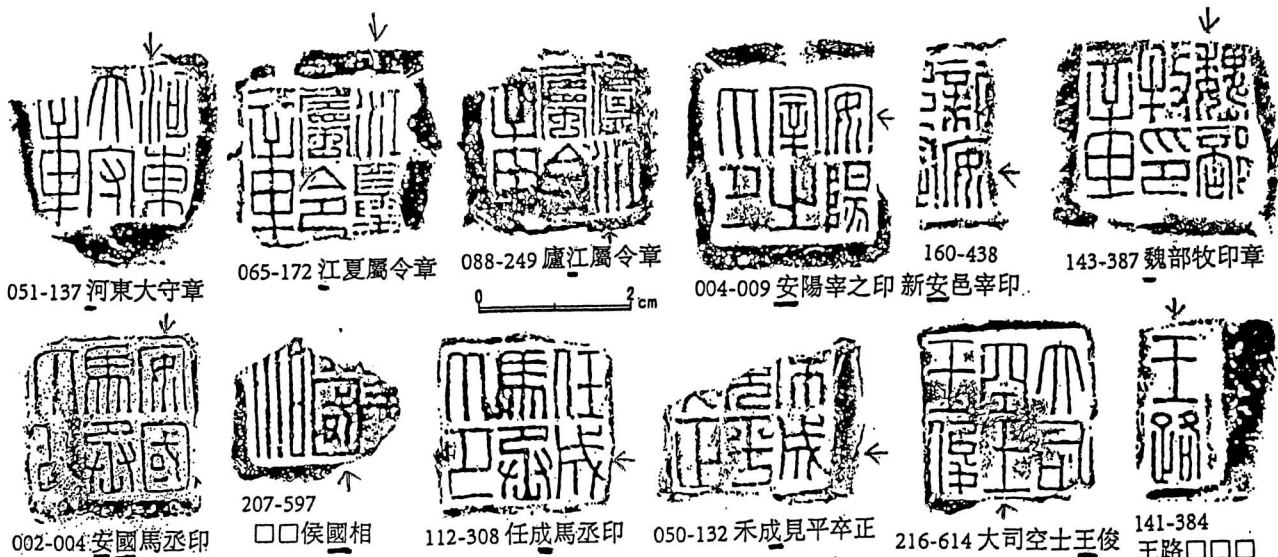


図 12 王莽代 (新: AD. 8-23 年) 封泥の「シ」, 「女」, 「國」・「戈」, 「王」(馬 2016 より)

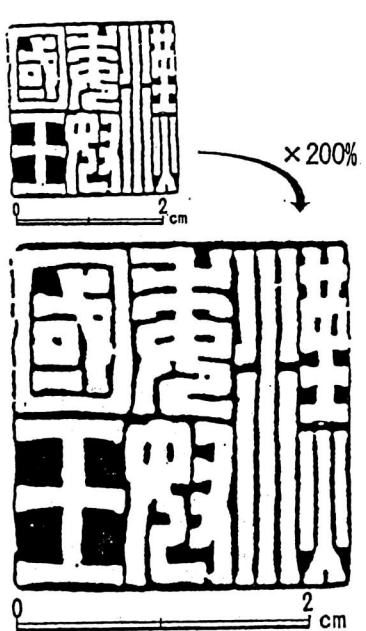


図 13 「漢委奴國王」金印



藤貞幹『好古日録』で『宣和集古印史』の「親魏倭王」を引用
 図 14 三浦 2006 が贋作に関わったと推定する藤貞幹は偽物「親魏倭王」を見抜けなかった

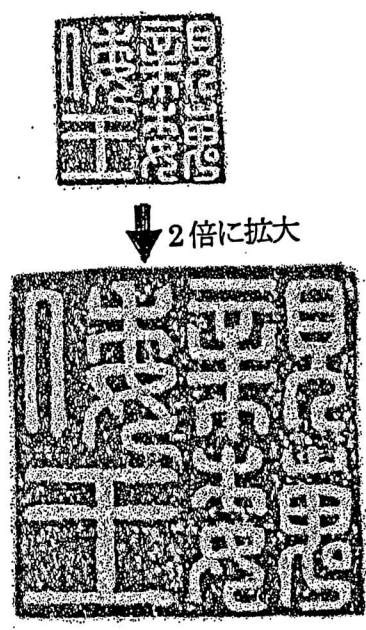


図 15 江戸時代の高芙蓉の篆刻には金印の「シ」の特徴はない

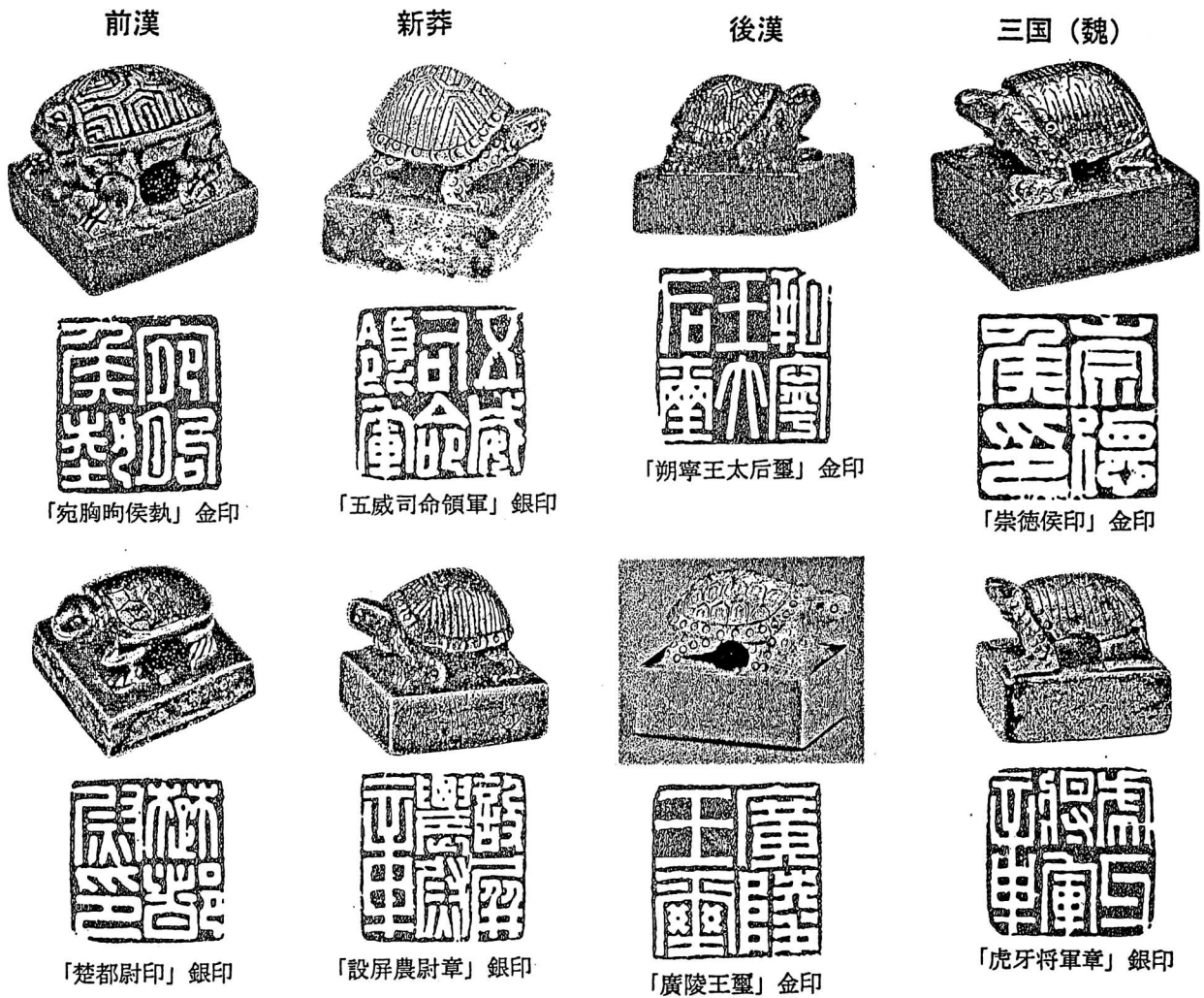
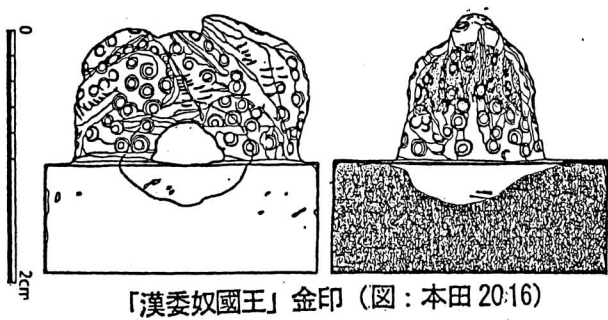
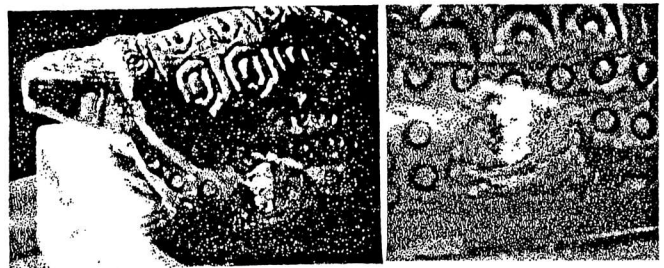


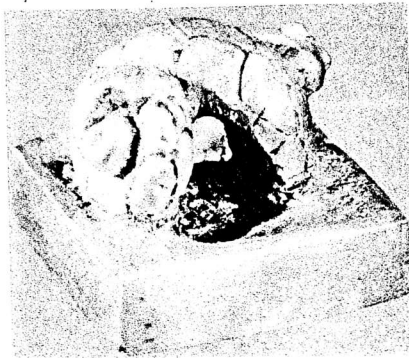
図 16 亀鈕形態の変遷 (孫慰祖 2010『歴代璽印 断代標準品図鑑』吉林美術出版社より作成)



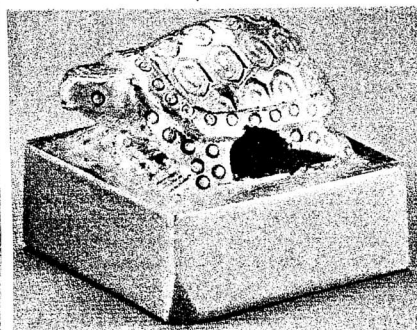
「漢委奴國王」金印 (図: 本田 20:16)



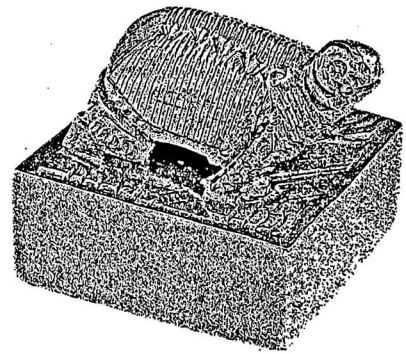
廣陵王璽の鈕孔 (石川撮影)



前漢:「滇王之印」金印



後漢:「廣陵王璽」金印



西晋:「鎮南將軍章」金印

(横断面は石川観察による模式図)

図 17 鈕孔下面の窪みの変遷 亀鈕の形態変遷と対応する